

あなたの秘書艦

天寝子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秘書艦と提督との何気ない日常。

どちらか一方だけが寄り添っていてもバランスは取れません。
きっと誰もが胸に閉まっているはずの感情――

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

〈病み夜の鎮守府〉とは違う世界線です。

目

次

秘書艦 霞 編

秘書艦 霞

一週間

久しぶりの鎮守府

いつかきっと①

いつかきっと②

日常

20 16 12 8 5 1

秘書艦 霞 編

秘書艦 霞

「触らないでちょうどいい！」

そう言つて手を払い少女は去つていった。去る直前に「クズ！」と罵つて。

ツンデレ、なんでものではない。心の底からの言葉だつた。少女の発した言葉は嘘偽りなく、少女の本心だつた。

俺と霞の間に会話はない。

彼女が秘書艦になつてもう一年にもなるが、会話らしい会話は今まで一度たりともなかつた。

仕事において最も重要なものは何か——

——コミュニケーションである。

そう教わってきた俺にとつて霞という少女はとても扱いにくい存在だった。

『嫌い』という訳ではない。少なくとも俺は彼女のことが『好き』だ。けれど彼女は違う。

鎮守府内で俺のことを本心から『クズ』と罵るのは霞以外にはいなはずだ。それは今まで艦娘とのコミュニケーションを欠かさなかつた俺だから言えること。

霞は手に持つた書類に目を通し、重いため息をつく。

彼女は自分に厳しく、他者にも厳しい。それ故に他者へのあたりが強く、勘違いされやすい。

けれどそれは彼女の優しさ故のことなのだ。

そんなことを本人に言つたところで相手にもされないだろうが。「何、ジロジロ見ないでちょうどいい。仕事、終わつてないでしょ」

俺に見られていたことに気づいたのか、気づいていたのか、彼女は子どもが見れば怯んでしまうほどにキツい目付きで俺を睨んだ。蛇に睨まれた蛙、という言葉を理解するのにこれほど最適な体験は

ないだろう。

霞に言われた通り、仕事を終わらせるべくすぐに視線を書類に戻す。

朝から細かな文字列に目を通しているせいでとてもじやないが集中できない。

目頭を抑え、軽く揉む。すぐに目を開くがやはり元には戻つていなさい。

「すまないが仮眠を取らせてくれ」

「そう、じゃあ私は部屋に戻るわ」

俺の許可を待たず、霞は執務室をあとにした。

「難しいな……」

本当に、難しい。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「霞ちゃん、ですか……」

「最低限俺の指示を聞いてくれればそれでいいんだが」

翌日、仕事を終え俺は大淀と二人、執務室にいた。少し相談があつて呼び出したのだ。

俺の悩みの種である張本人は浴室や工廠の点検に回らせてある。

「提督から何か言われても答えないと……」

——先手を打たれていた

大淀は申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

気にするな、俺がそう言うと大淀は更に申し訳なさそうに下を向いた。

大淀と霞の仲の良さは俺も重々承知している。それは例え提督であろうとも蔑ろにしていいものではないということも。

大淀がダメなら足柄か、とも思つたがそれも同様、恐らく霞は自分と仲の良い艦娘全てに手を回している。

大淀は「申し訳ありません」と何度も謝つていたが、仕事が残つているというので部屋へ返した。

一人になった部屋で年甲斐もなく悩んでしまう。年頃の小さな娘を持つ父親なら同じような悩みに遭遇するのではないか、と考えるがそれはそれで話が別か。

この鎮守府に就いてもう何年も経ち、殆どの艦娘とは仲良くなれたと思っている。もちろん、これは俺が勝手に思っていることであり、艦娘からしてみればキモイと思われているのかもしれない。

コミュニケーションは毎日欠かさず、駆逐艦の子たちとも毎日遊んでいる。一度海に出れば彼女たちは侵略兵器として見られてしまう。人々からのそんな視線によるストレスを少しでも軽減できれば、と思つて始めたことだが、いつの間にか俺の趣味へと変わつていった。お堅い軍服の上着を脱ぎ、無造作にソファに放り投げる。ワイシャツの裾を捲り、息苦しくないようにボタンを外す。

秘書艦である霞の前ではこんなにラフな格好はできないが、一人であるというのなら大丈夫だろう。こちらの方が俺としては昔を思い出せるので楽なのだ。

無意識のうちに出てきた重苦しいため息は俺の中に蠢いていた何かを全て持つていってくれたようで、仕事の疲れからか俺は睡魔に襲われてしまった。

一度、ソファに寝そべると驚くほど簡単に瞼は閉じた。

目覚め、時計を確認する。眠る前、大淀と話をしていたのが確か昼2時頃だつたはずだ。それから俺は3時間近くも寝ていたらしい。秋も終わり頃、日は短くなり外は暗い。執務室の中はいつ間にっていたのかは知らないが、電気がついていた。

「……起きたの」

扉の軋む音を響かせ入室してきたのは霞だ。今朝顔を合わせたときとは違い、髪を解いている。

初めて見る霞の姿を前に呆気にとられないと霞は嫌そうにしながらも俺の前に座つた。

テーブルの上で書類をトン、と整理し、それを渡す。そこにまとめ

られていたのは今日点検させていた浴室や工廠についての艦娘たちの生の声だ。

浴場を広くしてほしい、露天風呂が欲しい、なんで混浴はないのか、工廠の耐久度をあげて欲しいなどなど。いつたい誰が言つたのか、と思うようなことまであり、見ていて少し楽しかった。

「これで今日の仕事は終わり。私は部屋に戻らせてもらうわ」

顔を合わせたのは……いや、目を合わせたのはほんの数秒、霞はすぐには顔を逸らし俺の視界から外れた。

扉が閉まる軽い音が執務室に響く。

いつの間にかテーブルの上に置いてあつたコーヒーは俺好みの味がした。

一週間

鈍色の空を見上げ一人、黄昏れる。少しづつ降ってきた雪が草花を白く染め、冬の始まりを知らせている。門から見る鎮守府はやけに大きく、初めの頃と比べてよくここまで成長したな、と感じさせてくれる。

数日前に来た知らせにより、これから大本營へと向かわなければならなくなつた。

鎮守府の運営に関しては長門、大淀、霞に一任しているため心配はない。提督不在で出撃させるわけにもいかず、艦娘たちは事実上一週間の休みを与えられる。もちろん、鎮守府の外に出ることは許されることではないが、彼女たちにとつて休暇は特別なものだろう。

邪魔をするわけにもいかず、俺が不在だということは書類のみで伝えた。いちいち口で伝えるのも鬱陶しいと思つたからだ。

「提督、お気をつけて」

「ああ、あまり仕事はないと思うが……大淀、よろしく頼む」

見送りは大淀のみ。朝早く、ということもあり、駆逐艦の子たちは起きてはいない。雷にはお見送りをさせろ、と言われたが、子どもを早く起こすわけにもいかず、こうして大淀のみに見送られているわけだ。

「何かあれば大本營の方に連絡を頼む」

静かに見送られ、俺は鎮守府をあとにした。
やはり見送りは静かな方が楽だ。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

鎮守府からあいつがいなくなる。

そんなことは私が来て以来初めてのことだった。

朝早くに出て行つたらしく、雷や金剛さんなんかからは批判の声が相次いだけれど、その辺りは上手く大淀さんが抑えてくれた。
あいつのいない執務室はいつもと変わらない。

私とあいつには会話はないから。

出撃や遠征はなく、仕事も簡単な書類仕事だけ。正直、一週間もかからない簡単な仕事ばかり。書類よりも大変なのはあいつがいないことによつて荒れるであろう鎮守府を制御すること。こればかりは私だけではどうにもならない。

出撃はない、と言つても敵が攻めてこない訳ではない。そのためには臨時司令官となつた長門さんは朝から頭を悩ませていた。

敵が攻めてきた訳ではない。ある意味敵なのかもしれないけれど。「提督はあまりミスをしない方だ……しかし、今回の判断は少し、いや、大きなミスだ……」

滅多に座れない提督の椅子に座ることにテンションが上がつていたのも束の間、長門さんは鎮守府が荒れゆくことに悩んでいた。原因はもちろんあいつ。あのクズが朝一で出て行つたせいでお見送りができなかつた、と嘆く人たちが大勢いたのだ。

今生の別れでもあるまいしそこまで荒れることでもない。なんて思つていたけれど、私達は軍艦。戦地に行つたまま帰つてこない、なんてことは日常的に有り得た話だ。その感情が今も消えない艦娘は多い。だからこそ今こうなつているのだ。

私だつてそういう経験が無いわけではない。けれど、別にそんなに大げさにする事でもないとと思う。

「霞、私はこれから食堂に皆を集めて陸奥と一緒に説得していく。仕事の方を進めておいてくれるか」

そう言つて長門さんはツカツカと食堂へ向かつていった。
仕事の量はそこまでじやない。きつとすぐに終わらせられる。
持つてきていた手帳を開く。

これは日記だ。

私がこの鎮守府に来てからの日々を毎日欠かさず書いている。それを見返すのが私の趣味になつていて。

「霞ちゃん、入りますよ」

ノック音が聞こえて慌てて日記を閉じる。別に見られて困ることは書いていない。でも日記を見られるのは少し恥ずかしい。

部屋に入ってきた大淀さんは疲れ切った様子でソファに倒れるようになつた。

大淀さんは唯一あいつを見送つた。その事が原因で金剛さんにあらぬ疑いをかけられ、魔女裁判的なものにかけられていたとかなんとか。

「提督がいないとこんなになるなんて……少しは予想してましたけど

「お疲れ様、あいつのせいで私たちの仕事の量が増えるなんて酷い話よ」

大淀さんはあまり人前では見せないようなため息をつき、大きく伸びをした。

「そう言えば、霞ちゃんは寂しくないの？」

「はあ？ 寂しいわけないでしょ」

私は金剛さんたちとは違つていわゆる、提督ラブ勢と言われる人たちとは違う。

確かに、あいつが一週間もいないなんていう経験はしたことが無い。けれど、たかが一週間だ。別にあいつがいないからと言つて私の生活が大きく変わるわけではない。

「んー、寂しくなつたらいつでも部屋に来ていいからね」

「だから！ 寂しくないのよ！」

大淀さんの冗談を流し、私は話をそらすためにお茶を入れに立ち上がりつた。

あいつが帰つてくるまで、あと七日。特に感じることは何も無い。

久しぶりの鎮守府

「戻ってきた……」

一週間、という予定を少しオーバーしてしまったが約三週間で鎮守府へ戻ってきた。自分が思っていたよりも会議が長かつたのもあるが、久しぶりに会う同期、先輩、後輩と顔を合わせたのが楽しくて少し長めにあちらにいた、というのが内訳だ。

元々、大淀には伸びるかもというようなことは伝えておいたので俺が戻らないことによる弊害はないと思う。まあ、大淀たちにかける迷惑は相当なものなのかもしれない。その辺はあとで合わせておこう。

「テートークー！」

鎮守府に入ると視界が一瞬で覆われたと同時に後ろへ飛ばされた。

「久しぶりネー！」

「金剛、ただいま」

上に乗った金剛が涙目を浮かべている。よく見れば金剛以外にも何人も後ろに控えている。

「皆さん提督がいなくて寂しかつたんですよ」

「大淀、すまないな迷惑をかけた」

「いえ、私はそんなに……」

珍しく歯切れの悪い言い方の大淀。恐らく俺が留守にしていたことが原因で慣れない仕事をさせられたのが原因だろう。それは大淀だけじゃないはずだ、長門や霞も同じように疲れているはずだ。

金剛の抱きつきから逃れ、駆逐艦の子たちからも逃れようやく執務室にたどり着いた。

執務室には誰もいない。この時間帯、工廠などの設備点検に出かけているのだろう。

綺麗に整頓されている机を見る。書類が綺麗に仕分けられ、見やすくなるまでられている。三週間前の俺の机よりも整えられていてなんとも情けない気持ちになる。

ふと、机の上の手帳が気になつた。俺の私物ではない。何となく手

に取つて中を覗く。これは、日記だ。

中に書かれていたのはこの鎮守府に来てからの出来事だ。

「……これは、霞の日記か」

内容はありふれたものだつた。

姉妹艦との再会、仲のいいもの同士の交流や俺との仕事。俺に関して書かれているのは『仕事が遅い』だとか『整理整頓ができない』など、みつともないことばかり。

「ん、これは最近のか?」

ペラペラとページをめくつていくとつい最近、二週間前の日記を見つけた。俺が大本営に行つたときのものだ。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

11月3日

『今日からあいつが鎮守府を留守にする。大本営からの招集らしい。皆少しだけ気分が落ちていた』

11月4日

『あいつがいない執務室は初めてだつた。長門さんも大淀さんも二人とも忙しそうにしていた。かく言う私も慣れないことばかりで少しだけ忙しかつた』

11月5日

『暁たちがあいつがいなくて寂しいらしく、執務室に来ることが多くなつた。長門さんが仕事そっちのけで相手をしていたことが印象的』

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

その後もペラペラとめくつていつたが、鎮守府内で目立つた事件事故はなかつたようだ。

俺が帰つてくるはずだつた日の日記を見つけた。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

11月10日

『あいつが帰つてこれないそう。本当にクズ』

11月11日

『私しか見ないものだから告白しようと思う。私はあいつが帰つてすることを楽しみにしてた。少しだけだけど。やっぱりあいつがいな

いことで鎮守府に活気が無くなっている。それが嫌だっただけ』

11月12日

『いつ帰つてくるか、という連絡は依然としてない。なんでなの』

11月13日

『最近、肌寒くなってきたからあいつの服を羽織つて。暖かくてい
い匂い。一枚持つて帰ろう』

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

そこで一旦読むのをやめた。雲行きが怪しくなってきたからだ。
確認のためクローゼットを開く。確かに一枚無くなっている。どう
やらここに書かれているのは本当の事のようだ。

何故、霞が。……いや、考えるだけ無駄か。あとで聞いておけばいい
いだけなのだから。

…………やめておこう。

□□□□□□□□□□□□□□□□

『帰つてこない』

『大本營で何かあつたのかもしれない。大淀さんや長門さんはそんな
ことないつて言うけれど本当かわからない。何か連絡があればいい
のに』

『あいつがいないだけでこんなになるなんて思つてもいなかつた。も
しこのまま帰つてこなかつたら……』

『おかしい。何も連絡が無い。なんで?』

『もしかして捨てられた?私のせい?やめて、置いてかないで』

□□□□□□□□□□□□□□□□

「…………大問題だ」

どう解決しようか。一步間違えれば手遅れ、いや既に手遅れな気も
するが……まずは霞に会わないことには始まらない。誰かに相談す
べきだろうか……。

ガチャ、と扉が開く音が聞こえ咄嗟に手に持った手帳を机の上に置
いた。

入ってきたのは霞。少しだけ気まずい。

「…………帰つてたの」

「あ、ああ。少し予定より長かつたけどな」

話を切り出そうにもいざ本人を目の前にするとそれはむずかしい。

「ねえ

「なんだ？」

「もうどこにも行かない？」

「いや……それはわからないな。今回みたいに大本営からの通達があれば行かなければならぬからな」

俺がそう言うと霞は顔を伏せた。「そう」と短く呟いたあと霞はお茶を入れに背を向けた。

手帳のことは気づいていない様子。これを返してもいいものか、俺から返せば中を見られたことに勘づくだろう。どうすれば……

霞が持ってきたお茶を飲み、今後について考える。まず、第一にやらなければならないのが霞のケアだろう。

日記を最後まで読んだ訳では無いが、あの様子だとかなり不安定なのかもしれない。

霞の日記をバレないように内ポケットにしまう。霞に気づいた様子はない。ぼーっと窓から空を眺めているだけだ。

「霞、俺はちよつと鎮守府の様子を見て回つてくる」「そう」

そう言つて執務室から出る。気分転換と様子見、そして相談者探しを兼ねている。

霞も一緒に連れていくべきだった、と気づくのはもう少しあとのことだ。

いつかきつと①

気分転換に執務室を離れ、行く宛もなくぶらぶらと鎮守府内をさまよっていると何となく視線を感じた。

思い切って振り返つてみると何かが壁の影に隠れるのがわかつた。きつと誰か、青葉あたりがつけてきているのだろうと勝手に容疑者を絞り、その壁へと近づいた。

「ちょ、ちょっと！ 来ちゃつたじやない！」

「う、うるさいわねっ、あんたが見つかつたからでしょ！」

コソコソと話す声が聞こえる。どうやら二人組のようだ。そしてこの感じからして……

「曙、満潮、何をしてるんだ？」

びくつ、と二人の肩が跳ね、ブリキの人形のような動きでこちらを見た。

下手な愛想笑いを浮かべ少女二人は後ろへと逃げようとする。

「こら、二人とも。言うんでしょ？」

と、二人の後ろから更についてきていたのか鳳翔が出てきた。

母親然とした振る舞いに二人はしゅん、と小さくなりこちらへ向き直つた。

もじもじと照れくさそうに指を動かし、顔を赤らめて下を向いたり、横を向いたり。新手のいじめか何かか、というような沈黙が続き、曙が口を開いた。

「あ、あの……っ！ ク……じゃない、提督！」

大声で呼ばれ、緊張がこちらにも伝わる。

手のひらにぐつと力を込めた曙は大きく息を吸う。

「い、今までごめんなさい！ クソとか言つてごめんなさい！」

「……ほら、満潮ちゃんも」

鳳翔が小声で耳打ちし、満潮も恥ずかしそうにしながらも口を開く。

「私も、ウザイとか言つてごめんなさい……！」

俺がキヨトンとしていると、鳳翔から説明が入る。

「二人とも提督がいない間、少しだけ荒れてまして……。『提督が帰つてこないのは私のせいだ』なんて言つて。きっと、捨てられたんだと思つたんですよ。長いこと帰らないことで不安が爆発しちやつたんですよ」

二人は俺が鎮守府に帰つてこないのを自分たちのせいだと思い込んでいたようだつた。『自分たちが提督にあんなことを言つたから、捨てられた』と本気でそう思つていたそうだ。

今も泣きそうな二人の顔を見て、俺が言つてやれる言葉。「ただいま、一人とも。俺はお前達を捨てたりしない。だつて俺はお前達が大好きなんだから」

両手で二人を抱きしめてやり、頭を撫でる。

肩にあたる濡れた感触が酷く俺を後悔させた。

もうこうならないようにしないとな。

「——提督、そろそろお仕事の方へ……」

「ん、あ、ああ。仕事なら大丈夫だ。三人とも、これから時間はあるか？暇つぶしに付き合つてくれないか？」

「で、なんで工廠なのよ」「お、曙の調子が戻つてきたか？」
「つさい！」

思いつきり尻を蹴られた。

どうやら先程までの曙ではなく、今まで通りの曙に戻つたみたいだ。

しんみりした曙と満潮を見ているのは少し面白かったが、やはりいつも通りの対応の方が落ち着くものだ。

さて、工廠にやつってきた理由だが……特にはない。なんとなく目についた施設に片つ端から入つてみようと思つただけだ。なんなら明石から何か遊び道具でも、と思つた次第だ。

工廠の熱気がこもった空氣感は嫌いではない。元々俺はこういった作業場の方が好きなのだ。

テーブルの上に置いてあつた機材を手に取り、なんとなしに見ていると奥から夕張が顔を覗かせた。

「あれ？ 提督、来てたんですか？ それに皆さんも」

「夕張、何か面白いものでも作れたか？」

俺がそう聞くと夕張はんー、と鳴らしたあと奥へと戻つて行つた。少しして何かを持つた夕張が妖精さんにそれを持たせてこちらへと送らせた。

「なんだ、これ」

「はい。ゴミです。捨てといてください」

どうやら体のいいパシリに使われたようだ。横にいる満潮と曙からの視線が痛い。こんな情けない姿を見せることになるとは。

「それじゃ、早く行きましょ」

「司令官、それ持てるの？」

「ん、任せろ。これでも男だからな……」

ダンボールにまとめられたゴミを持ち上げ、落とさないようにしつかりと支える。

危なそうに見守る二人の視線に笑つて答えながら俺は工廠をあとにした。

「……あれ、鳳翔は？」

「鳳翔さんなら工廠に残つたわよ」

「夕張さんに何か用事でもあつたんじゃないの？」

鳳翔の事だから夕張のあの身なりを注意でもしにいつた、というところか？

タンクトップに作業着というラフすぎる格好だつたからな……鳳翔の何かに触れたのかもしれない。

「思つてたよりも溜まつてるわね。いつもこうなのかしら」

「知らないわよ、司令官は？」

「―――あ、ああ、俺もよく知らないんだ」「知つておきなさいよ……」

俺は早めにゴミを置き、その場を立ち去ることにした。

俺が見たものは何だつたのか。考える必要も無い。あれは睡眠薬だ。

「ちょっと、何もそんな早く帰らなくてもいいんじゃないの？」

「ああ、すまない。少しやることを思い出してな」

俺がそういうと一人は互いに顔を見合させて同時にため息をついた。

「なら早く戻りなさい」

「また今度一緒に遊びましょ」

二人は自分の部屋へと戻つたみたいだ。残された俺はと言ふと、どうにも執務室に戻りたくない気持ちで一杯だった。

胸元に入っている日記帳に目を通すべきかどうか……

俺は人目のない場所を探して鎮守府内を歩き始めた。

いつかきつと②

人通りの少ない鎮守府裏。その木の影にもたれ掛かり、手帳を取り出す。

「それ、読まなくてもいいわよ。別に」

後ろからかけられた声に驚く。誰にもつけられていなかつた、ここには誰もいなかつたはずだ。だと言うのに、人に――本人につけられていたなど……

俺が何かを言う前に霞がぽつぽつと話し出す。

「あんたが帰つてこなかつたとき、忘れられたんだつて思つたの」

「そんなわけ、ないじやないか」

霞の方へは顔を向けることが出来ない。俺は木の影に隠れるように声を出す。

霞の表情を見ることは出来ないが、声でわかることがある……はずなのだが、それもわからぬ。何もこもつていてない無機質な、機械とも思えるような……そんなはずはないと言うのにそう思えてしまつた。

「あんたのいない生活なんて初めてだつたから、わかんなかった」

きつとこれは霞が俺に対して初めて語つてくれる本心なのだろう。

「だから、こんな感情……私知らなかつた」

霞はゆつくりだが、その胸の内に眠つっていたものを言葉にする。

「知りたく……なかつた。いえ――」

手に持つていた手帳を開くことはかなわず、俺は木にもたれかかりその言葉の続きを待つだけ。

今俺が霞に何かできることがあるのだろうか、なんて無責任なことはしない。これは俺が招いた結果だ。きっとその責任をとらないとならないのだろう。

「――自覚したく……なかつた。自覚してしまえば、いつ失うのかが怖くなる。消えてしまうのが恐ろしくなる。私は弱いから、あなたを失う恐怖には絶対に勝てないから。だから、目を逸らし、自分の気持ちを騙して、あなたを突き放すことで自分自身を守ろうとした。でも

……でも……」

これが真実。

霞、という小さな一人の女の子が抱え込んでいた大きな感情^モ。

自分を騙し、周りに嘘をつき、誰にも悟られることのなかつた本心。「そんなことは無理だつたの。私はあなたが必要だつて気づいてしまつたから。私が私であるためにはあなたがいなければならぬつて、あなたが消えれば私は壊れてしまうつて……気づいてしまつたら……」

覚悟を決め、俺は霞と向き合う。

陰から一步踏み出すだけが、嫌に重く感じた。霞の表情^{カオ}を見るのが怖かつた。

けれど、俺には責任があるから。霞の気持ちに気づけなかつた、こうなるまで放置してしまつた責任が。

その瞳は酷く濁つていた。光と呼べるものはどこにも見当たらなかつた。グルグルと渦巻く海のように深く、その目は俺を捕らえて離そうとしなかつた。

無機質だつた、空っぽだつた表情はゆつくりと笑みへ変わつた。

そこには何も無い。ただ空虚な笑みだつた。

「あはっ……私、なんで気づかなかつたんだろう。こんなにも、こんなにもこんなにもこんなにもこんなにもこんなにも——
——あなたが、好きだつたのに」

「霞……」

「私はあなたがいないとダメなの。自分を保つていられない。自分の弱さを隠せない。どうして、どうしてあなたは私の前から消えたの……そうじやなれば私はあのままでいられた。何も知らず、気づかず、ただあなたに罵声を浴びせるだけのままでいられた……！あなたが、あなたが私を一人にさせるから！」

そう、これは俺の責任。

艦娘たちとのコミュニケーションを最も大切としていたというのに、霞とはそれをしなかつた。

——いや、『いつかきっと』を願つて、それを後回しにしていた。結局のところ、霞をこうさせたのは——壊したのは俺だ。

いつかきっと仲良くなれる。

いつかきっと他のみんなと同じように霞とも笑い合える。

いつかきっと家族のように、笑つて過ごせる日が来る。

なんて、ただの幻想に過ぎない妄想に期待し、俺は彼女を一人にした。

これはそれのツケなのだろう。

「もう許せない。無責任に愛情を振り撒き、独りよがりな幸福に浸つたあなたも！その愛情に甘え、自分の気持ちを隠し続けた私のことも！だから、だからだからだからだからだからだからだからだから……責任、とつてよね」

笑つていた。

彼女は——霞は俺に初めて見せるとびつきりの、少女らしい可愛い笑顔を見せていた。

「……ああ、わかってるよ。霞」

「あはははっ……わかった？私はあなたがいないとダメ。あなたも私がいないとダメなの。だからこれからは私があなたの世話をしてくれるわ。朝起きてから夜眠るまで。永遠に、これが先ずつと私たちは離れることは無いの。よろしくね、『司令官』

いつか、彼女が目を覚ますときがあるのだろうか。

正気に戻り、いつもみたいに罵声を浴びせることがあるのだろうか。

仕事が遅い、なんて言つて俺を睨むことは。

昼寝をしていた霞の寝顔を見て、本気で怒られるることは。

仕事中に遊んで蹴られることは。

俺はまた、『いつかきっと』を願つて、意味の無い妄想に逃げるのだろうか。

「それじゃあ、司令官。仕事に戻るわよっ」

右手にしがみついた霞は空虚で愛らしい笑顔を浮かべるだけだつ

七〇

日常

「おはよう、司令官。よく眠れた？」

朝、俺の顔を覗き込むのは小さな少女だ。

年相応の愛らしい笑みを浮かべ、起きたばかりの俺の体を揺する。起きたばかりでいつもの様に髪を結んでおらず、珍しいな。なんて思っていたのが懐かしい。

俺は霞と同じ部屋で生活している。これは霞の要望だ、聞かないわけにいかない。

支度を済ませ、執務室へと向かう。私室から距離は離れていない。が、霞はそんな短い距離でも俺と離れるのが怖いらしく、決して手を離すことは無い。

「司令官の手つて大きわよね」

「そりゃあ大人だからな」

自分の頬に擦り付ける様子を見て、犬と重ねる。前までの冷たい野良猫のような雰囲気はどこにも無い。稀に見せる冷たい一面がそれなのかも知れないが。

霞と繋いでいる方とは別の手で執務室の扉を開く。仕事のために俺は椅子に座る。霞は直ぐに机の上に置かれていた書類へと目を通す。

この辺の切り替えの早さは凄まじい。先程までの様子は一切感じられなかつた。俺も霞を見習つて仕事に励むことにしよう。昼になり、休憩をしようと提案をしたときだつた。

霞はおもむろに口を開き、こう言つた。

「そう言えばあの日、曙と満潮姉さんを抱きしめてたわよね」

笑いながら問い合わせる様はまさに浮氣を疑う妻のソレと同じ。

顔だけは笑つているもののその目は全く笑つてなど無く、怒りも感じられない。

「……いや、あのときはああするしかなかつたというか、勢いで、といふか……」

誰が聞いても言い訳にしか聞こえない。俺でさえもそう思つてい

るのだから。

なんとも情けない答えに霞は「ふーん」と言いながらも納得してくれたみたいだつた。

このままでは空気が悪くなることを察し、俺は霞を連れて食堂に行くことにした。そのまま執務室にいてはいらぬ墓穴を掘りそ�だつたからだ。

食堂は艦娘達全員が入れるように新艦の子たちのために増設されたため、信じられないくらい広い。敷地面積とかどうなつてるんだ、なんて俺が考えることではない。全ては妖精さんの言う通りなのだ。

食堂には昼時ともあつて多くの艦娘達が集まつていた。子供たちは集まつてみんな仲良く食べている。一部軽巡たちが保護者代わりに見守つているのは見ていて中々微笑ましい。まるで保育園だ。

「こんにちは、提督。今からお昼ですか？」

入口で立ち止まつていると背後から加賀が声をかけてきた。隣には赤城がおり、彼女らもちょうど今から昼食のようだ。

「まあな。仕事も一区切りついたし、サボ……息抜きにな」

サボり、と口走りそうになつたものの、霞の鋭い睨みでなんとかそれは回避された。危うく俺がサボり魔であることが皆にバレるところだつた。……今更だが。

「お二人共、今から昼食なら一緒に食べませんか？折角の機会ですし……ね？」

赤城がそう提案する。俺に、と言つよりは俺の横に立つ霞に対してもうう。赤城は何かと察しのいいやつだ。霞のちよつとした変化を見逃さなかつたのだろう。

「いいのか？」

「お互い様ですよ」

ワインクした赤城に一瞬ドキッとしていると、霞は思いつきり俺の足を踵で踏んずけた。

「そう言えれば提督」

「なんだ?」

俺が毎日頼んでいる間宮特製日替わりランチを楽しんでいたときだつた。特盛のカレーライスを頼んだ赤城が唐突に話を切り出した。横では猫舌の霞がラーメンをふーふーしながら食べていた。心中は可愛いで満たされていた。

「聞いてます?……話、進めますね。カウンセリング、した方がいいと思いますよ」

「どうした急に?」

「いや……ですね。最近、不安を感じたり、不安定だつたりする子が多いんですよ。ぶつちやけ言いますけど提督が帰つてくるのが遅かつたせいなんですけどね。それで、このままだと任務にも支障をきたす恐れがあります……」

赤城の言いたいことはわかつた。

どうやら現在、鎮守府内では夜眠れなかつたり、昼間でもぼーっとしてたり、部屋に引きこもつてたり、と艦娘達に問題が起きているそうだ。

なるほどな、工廠で見た睡眠薬はそういうことだつたのだ。てっきり料理とかに混ぜて大事件……なんてのを想像してた俺からしてみればまだ正しい用途で使つてくれている分いい方だつた。……が、放置してもいい問題でもないだろう。早急に手を打たねばならない。

赤城が情報をくれて助かつた。このままでは鎮守府が崩壊してしまうかもしねない。

「カウンセリングを業務に組み込むのはいいかもしないな……

まあ、面倒な書類仕事をしたくないっていうのもあるけど。

「仕事したくないだけでしょ」

そんなことはバレバレだつたようだ。

食事を食べ終え、俺たちは各自持ち場に帰ることにした。

赤城はよく喋つていたが、加賀はあまり——というか全く——話さなかつた。のだが……

「提督、あなたに忠告を…………身近な人ほど気をつけて。特に、正常

に見える人は、ね」

そんな言葉を残し、加賀は去つていった。最後に見せた加賀の表情は笑っているように見えた。あんな表情の加賀は初めて見るような気がした。